

## 第1回 知的・発達障害者等に対する公共交通機関の利用支援に関する検討会議事概要

日時：令和2年7月29日（水） 16：00～18：00

場所：合同庁舎3号館4F 総合政策局 AB 会議室（WEB 会議）

事務局より本検討会の設置、本検討事業の概要、当事者及び交通事業者へのアンケート調査の実施方針、既往の利用体験プログラムの実態調査、利用体験プログラムの検討方針について説明を行い、意見交換を実施した。その内容は以下の通りである。

### 〈知的・発達障害者等に対する公共交通機関の利用支援に関する検討事業の概要について〉

○当事者用のプログラムではあるが、交通事業者側の理解・啓発のためのプログラムを入れるべきではないか。

→当事者が利用体験するプログラムとはなっているが、当事者と接することで対応する交通事業者側も“気づき”があるようなプログラムにしていきたいと考えている。また、心のバリアフリーとして、接遇ガイドラインや接遇研修プログラムで整理しており、過去には交通事業者向けに“コミュニケーションハンドブック”を作成している。それらとリンクさせて活用する。

○本検討会のタイトルが「知的・発達障害者等に対する公共交通機関の利用支援に関する検討会」となっているが、ここに精神障害者は含まれないのか。

→含まれる。

○全国精神保健福祉会連合会委員はこのタイトルで納得しているのか。

→アンケートを拝見しても、知的・発達障害者の方にスポットが当たった内容だと感じる。交通事業者にアンケートをする際、“等”に対する補足的な説明をする必要がある。

○本検討会及び業務に障害当事者にも参加していただいたほうがよいのではないか。

→団体を通じて、当事者にアンケートを実施した上でヒアリングを実施し、意見を反映する。

→アンケートだけではなく、企画・検討段階からオブザーバー的な立場で参加できるとよい。

○知的障害、発達障害、精神障害は横並びにはならない。今回の検討会は知的・発達障害者を中心に話を進めていくという理解である。また、知的・発達障害者でも精神障害者と同じ症状の方もいるので、特に障害にこだわる必要はないのではないか。

○このプログラムでは誰のどんなニーズに答えるのか。当事者からこのようなプログラムが必要であるといった意見が挙がってきたのか、それとも当事者家族からなのか、交通事業者からなのか。

→障害者団体からも公共交通の利用が難しいという声があり、交通事業者からも知的・発達障害者等の方にどのように接したらよいのか分からないといった声もあるので、両者を補うようなプログラムを作成していく。

→当事者の声と言っていたが、当事者の家族の声をまとめた結果なのか、本当に当事者の声なのか。今回のプログラムが家族や事業者のニーズに答える形での公共交通機関利用トレーニングプログラム（医学プログラム）になってしまうことを懸念している。練習する機会があってもよいが、当事者の自由の領域を拡大するために、社会側が変化する必要がある。当事者と家族のニーズも切り離しつつ、両者の声が尊重されるプログラムにして欲しい。

→当事者性を大切にしていきつつ、皆様からご意見をいただきながら今後の調査を進めていく。

### 〈障害当事者（知的・発達障害者等）及びその家族に対する公共交通利用支援に関するアンケート（案）について〉

○バスの項目で乗降時に利用する IC カードについての設問を設ける。

○移動というのは場面の連続であり、本アンケートでは場面ごとの設問設定になっており、答えやすいと感じた。具体的にどのような場面での困りごとが多いのかが分かると、交通事業者側にも具体的な対応方法を伝えることができる。

○放送が騒々しい、車内が暑すぎるなどの“感覚過敏”についての設問を設ける。

○異常時について、もっと丹念に聞き出したほうが今後、役に立つのではないか。

○駅で切符を買う場面において例として4つ挙げられているが、困りごとについて、より具体的に知りたい場合、この回答方式では何に困っているのか分からないのではないか。具体的に書く欄に記述しない人がいた場合、絞り込みが難しいと感じる。

→回答方式については、再検討する。

○障害の種類において、発達障害だけ手帳の有無を聞いていない理由は何かあるのか。障害の有無を聞き、別途、手帳の有無を聞くほうがシンプルでよいのではないか。

→再度、整理する。

○当事者は問題意識なく行動しているが、周囲からすると問題行動であるというような例が挙げられているが、この表現で当事者は回答できるのか。（「必要以上に車内をうるついでしまう」など）

○事業者からすると他の乗客との関係性についての困りごとなど、ストレス要因に転じてしまうような特性の無理解にどのように対応するかについてまでは、関心が及ばないのではないか。もう少し、周りの乗客との関係性についての設問があってもよいのではないか。

→現アンケートでは、当事者視点と家族や周囲の視点が混在しており、当事者と家族を分けて考える。表現方法については、皆様にご相談させていただく。

### 〈知的・発達障害者等の公共交通の利用に関する交通事業者向けアンケート（案）について〉

○事業者の障害者への対応方法だけでなく、事業者が困っていることが書ける欄を設けてほしい。

→調査を進める上で、事業者には細かな部分についても聞いていく。

○知的・発達・精神障害者別に社員研修をしているかを聞いているが、障害別に研修をしているものなのか。

→障害別に聞いている意図としては、このアンケートを回答する事業者が「知的障害者用の研修は内容が薄かったな」など、気づいていただけたらいいと思う、このような構成とした。ただし、知的・発達・精神障害者をまとめても問題はないと思うので検討する。

### 〈ANA そらばす教室（搭乗支援教室）について〉

○日常生活においてバスや電車のほうが密着しているので、バスや電車の体験プログラムが実施できたらよい。

### 〈VRを活用した障害理解の可能性について〉

○利用者の体験プログラムとサービスを提供する側の障害理解体験プログラムがセットになって出来上がっていくことが意義のあることである。

### 〈利用体験プログラム（案）の検討方針について〉

○事業者職員がどこまで障害者の特性を理解しているのか心配しているところである。

→体験プログラムを実施する上で、事業者職員には障害者の方について理解していただく必要があり、そういったことも考慮したプログラムとする。

○プログラム案についてモデルプランが2つ挙げられているが、どちらかではなく、当事者が選択できるとよい。もしくは、ステップを踏んでいけるような仕組みだとよい。当事者の状態や要望を鑑みて選択できるプログラムがよい。

○「マニュアル（案）の運用体制のあり方の検討」とあるが、このマニュアルを作成した後、どのように展開・活用していくのか。これについて具体的に追記したほうがよい。

→具体的に事業者がプログラムを考えるに当たっての検討方法や運用・活用方法、他に関連するプログラム等の活用の仕方については記述する予定だが、皆様にもご意見をいただきながら進めていく。

○バス・鉄道を飛行機と同じようなプログラムの考え方・方法でよいのか。アンケートを使って方法を探ってみてはどうか。

→ANA のプログラムをそのまま持ってくるのではなく、バス・鉄道の利用という観点でプログラムの検討を進めていく。